

資料渉猟余話

その116

筆者が高等学校に入学したのは昭和25年で、校舎に關しては入学試験当日も同じ感じを持ったが、

ずいぶんと殺風景な、むしろ荒れた建物だなどという思いであつた。それも無理からぬことで、その頃校庭の北側にあつた体育館は、兵舎と

いつても工場に使われていたとかで、床板は全てはがされたままであつた。

ともかくここで記そうと思っているのは、その当時の先生

乱期から抜け切つておらず、軍隊から帰つて職もおぼつかないまま、発足したばかりの新制中学や高等学校に一時的に勤めておいでになつた大学の先生方がおられたが、先生もその

鹿間時夫先生と『こけし辞典』のこと

『こけし辞典』のこと

吉澤 健

大変魅力のある先生であつたので、先生を慕つて横浜国立

大へ、しかも先生の専攻の地学学科へ進学した人が幾人かいたといふことも耳に

その頃は戦後の混

こけしに關する辞典である。この辞典の監修者が何と鹿間時夫先生なのである。鹿間先生のお名前を目にしたので南信州地域資料センターの倉庫から借用したが、先生もその



お一人であつたと思つてゐる。ところで、筆者の手に『こけし辞典』という珍しい辞典がある。昭和46年9月20日東京堂から初版が発行された、570頁、4500円のものに『こけし・人・風

にあるのだが、はじめ鹿間時夫の名前を目にした時、同姓同名かと思いつつ奥付に発刊された『飯田高等学校の学校史』にも目を通し、当時

その後、昭和55年「鹿間時夫先生の『昭和二十二年六月、飯田大火直後、朝礼で小柄な風采の上がらぬ新任の先生が紹介された(東北

次のような突飛な記

は生徒一同をつれて採集してきた長石の結晶の形態計測で、これは大学の専門課程でやっていることである。人文地理の授業では、毎回黒板にパリの街の地図をかかげ、パリの地理・歴史・風物一般・人間・絵や文学を熟っぽく語り、パリの話だ

地学の授業ではタワーウィンのビーグル号航海記を原文で読ませ、一人ずつ説明させる。この有名な航海記は19世紀の古めかしい英語でくだけた書かれており、英語のリーターで学校の宿直室で大コンパをくりひろげ、用務員さんを仰天させたこともあつた。(後略)

何とも破天荒な、戦後の混乱期とはいへ、良き時代の姿である。それにしてもこの頃鹿間先生は「こけし」についての研究をされていたのである。辞典の序文その他にその辺のこ

この辞典は精細な示唆に富む一書である。筆者の母校で教えられ、理学博士であり、こけしの辞典編集と多方面で足跡を残された先生なので紹介した。